



Title	岡本かの子『花は勁し』論(二〇〇三年度卒業論文要旨集)
Author(s)	木村, 亜沙美
Citation	札幌国語研究, 9: 91-91
Issue Date	2004
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/2691
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

岡本かの子『花は勁し』論

近代文学研究室 〇一六五 木村亜沙美

岡本かの子の作品はこれまで単独で述べられたものではなく、多くの研究者によって「歪んで薄気味悪い」小説として述べられてきた。また、作者の実生活との比較の下に「男を飼う小説」として述べられた論が多い。だが、『花は勁し』には、女性の主人公が困難にもめげず逞しく生きる姿が描かれており、先行研究に言うような薄気味悪さは感じられない。本研究では、『花は勁し』を他の作品とは切り離し、テキストに沿って読み、かの子文学の特徴とされる「生命力」を肯定的に評価する。

作品が発表された昭和初期という時代は、男性中心の社会であり、世界大戦を目前に、多くの女性が、国や社会から家庭を守ることを要求されていた時代である。主人公の桂子のように、独身で「野心」を持って仕事に取り組んだ女性は少なかった。また、桂子の職である「新興活花の師」には、実際には女性の名は見られない。桂子には「世間」や「同業者」からの性差別があると読めるのである。

性差別よりも階級差別が切迫した問題であった当時、この作品が世に訴えた意味はそれほど大きくないかもしれない。だが約七十年が経った現在、女性が抱える問題はこの作品が提示する問題と同じである。〈自分らしさ〉を追及し理想に進む桂子の姿は、ジェンダーという視点から肯定的に評価できるのである。